

北京の智化寺

松浦章

I

北京の旧内城の東中央部附近に智化寺がある。智化寺は安藤更生氏が編輯した『北京案内記』（新民印書館、1941年初版、1943年10版）の内城の部において「智化寺 内一区禄米倉東口 朝陽門内禄米倉東口の路北にある山門内の一郭は、明代の巨闕として知られた王振の創建に因って名高い智化禅寺の古刹である。」（七九頁）に記される智化寺（写真②～④）が保存されている。公開はされていないが、外部から旧時の景観を伺うことが出来る。ここに若干紹介したい。

II

智化寺は王振が創建したとされる。王振とは光緒『順天府志』卷十六、京師志十六、寺觀一、内城寺觀に「智化寺、朝陽門内禄米倉東にあり。寺は正統間に太監王振が建てる。」とあるように英宗・正統帝に付いていた宦官王振である。『明史』卷三百四、宦官一、王振傳には「正統七年に至り、太皇太后崩じ、…振ついに跋扈し制するべからず。大第を皇城の東に作り、智化

寺を建て、土木を究極する。」とある。張太皇太后が没し、王振は他の閣臣を排斥して権力を極めた時期に建築されたのが智化寺であった。正統七年（1442）以降に建立されたようで、『北京案内記』には「寺の創建は正統九年正月とは言われるが、実は同八年の起工で翌九年三月の竣工になるものの様である。」（八〇頁）とされる。正統十四年（1449）モンゴル族率いるエセンが大同に侵略してきたため王振は正統



写真① 「全国重点文物保护单位 智化寺」



写真② 「智化寺 正面」



写真③ 「勅賜智化寺」正面門上部



写真④ 禄米倉胡同から見た智化寺

帝に親征を勧めた。しかしこの遠征が失敗に終わりエセン率いるモンゴル軍に明軍は全滅させられ英宗は捕虜になった。これが有名な「土木の変」であり、王振はこの事件の直接関係者であった。英宗は翌年還されるが、既に弟の景宗・景泰帝が帝位にあり、帰国後は南宮に幽閉の扱いとなった。ところが景泰七年（1456）に景泰帝が没して、英宗は天順帝として復位したのである。復辟した英宗は宦官劉恒の言を入れて智化寺に王振を祀る祠を建て、精忠と名付けている。光緒『順天府志』巻十六には「乾隆八年、像及び碑を毀つ、御史沈廷芳の奏請なり」とあり、『清史稿』巻四百八十五、沈廷芳の傳に「都城の智化寺内の明闕王振の造像及び李賢が撰するところの頌徳碑を毀つ」と記しているように乾隆八年（1743）に御史沈廷芳の奏請によって破壊されている。

Ⅲ

1999年8月27日の朝7時前に宿舍の干麵胡同にある紅十字会賓館を出て禄米倉胡同にある智化寺に行った。智化寺は禄米倉胡同5号にあり、「勅賜智化寺」の石の壁がある。現在の智化寺は幅およそ60歩、約40m、奥行き70～80mの敷地に保存されているが公開はしていないようであった。石碑には「全国重点文物保护单位 智化寺 中華人民共和國 1961年3月4日公布 北京市文物事業管理局 1981年7月立」（写真①）とあり、中国の重要な保護文物に指定されている。

智化寺は朝鮮国から使節として北京に来着した朝鮮使節も北京滞在中に宿泊施設として利用している。康熙三十二年（1693）十二月二十

三日到北京に到着した柳命天は『燕行日記』において「午前到北京に入る。朝陽門内の智化寺に止宿す。」と記し、康熙五十一年（1712）四月二十日に北京に到着した閔鎮遠も彼の『燕行日記』の中で、「智化寺に止接する。」と記している。本来は會同館とされる紫禁城の南にある施設に宿泊するのであるが、柳命天等の場合は蒙古の使節が、閔鎮遠等の場合はロシア使節等が既に到着し會同館を使用していたためであった。會同館は既に無く、その意味で智化寺は朝鮮使節が宿泊したことが判明する現存の重要な史跡とも言える。

Ⅳ

ところで北京の胡同の地番であるが、東西の胡同は北側が奇数で南側は偶数、東側は数字が小さく、西側は数字が大きくなる。南北の胡同は西側が奇数で北側は数字が少ない。

禄米胡同は朝陽門南小街に直角に連なり東西に長い胡同であるから智化寺のある5号は北側にあり南に面し、朝陽門南小街から離れた東側寄りにあることが判る。

智化寺のある禄米倉胡同の禄米倉は光緒『順天府志』巻十、倉庫に「禄米倉、計五十七廩、在朝陽門内南小街」とあり、禄米倉には57の米倉があった。この米倉については先に阡陵No.20（1989年10月）に紹介した「明清時代北京の倉庫」に含まれる倉庫群の一つであった。現在もその地名は残されているのである。

【参考文献】

博光・言牛「智化寺」『紫金城』1987年第五期。